

ゲスト◎書道家

# 武田 双雲氏

”書“を通じて、一億の人々に  
喜びと感動を伝えたい



アトリエと教室を兼ねたご自宅にある、双雲氏が人生の基本要素と考える「感謝 感性 感動」を即興で書いた作品の前にて。

社会に出て気付いた、周囲の環境に  
流されるだけだった自分

—— 書道はお母様に師事されたそうですが、子どものころから書道家を目指していたのでしょうか。

書道家を目指す気は全くありませんでした。3歳の

ころから母に書道を教わり、文字を書くことは好きでした。でも両親は、僕にいろいろな機会を与えようと思ってくれたのでしょうか。子どものころは水泳や空手などのお稽古ごとや塾にも通っていて、書道もその中の一つに過ぎませんでした。小学校高学年からは部活動の方が忙しかったほどです。身体が大きく運動神経

も悪くなかったので、先生に期待されて野球部などに入っていました。

しかし、何かに夢中になるということはありませんでした。勉強もスポーツも「負けて悔しいから頑張る」ということがなく、常に興味が分散していて、周囲から見ると落ち着きのない子どもだったと思います。部活の試合中に勝敗よりボールの回転の様子に気をとられたり、授業中に教室のカーテンの揺らぎに合わせて身体を揺らしてみたり、突然授業に関係のない質問をして、よく先生に叱られていました。母は当時の僕を、「やる気を出せばできるのに」と歯がゆく思っていたそうです。

一方、父からは、ふとした時に「お前は天才だけん」と言われました。何か特に褒められることをした訳でもない時に父から言われた言葉は、自分がどこか周囲から浮いているように感じていた僕にとって大きな心の支えになりました。でも結局、学生時代には将来何になりたいという夢もなく、ただ流されるまま社会人になってしまいました。

——では、書道家になったきっかけや理由はなんでしょう。

きっかけの一つは、就職後2、3年経って熊本の実家に帰って、初めて客観的に母の仕事ぶりに接したことですね。母は今も現役の書道家として、パフォーマンス書道の舞台なども行っていますが、その活動のパンフレットや、教室で生徒さんに指導している姿を見て、単純に「母ちゃん、格好いいなあ」と思ったんです。でも、その時は行動に移すことはありませんでした。

しばらくして、会社の先輩に「お前、字が上手いなあ、今度独立するので名刺を作ってくれないか」と頼まれました。あまり他人に褒められたこともなく、プラモデルも作れないほど手先も不器用な自分の作った名刺が「格好いい」「すごい」と喜んでもらった時、信じられないほどうれしかったんです。それで衝動的に、書道を仕事にしようと。ちょうどITベンチャーという言葉が開始したところで、インターネットで、名刺やロゴなどのデザインを筆文字で制作するお店をやろうと思ひ、会社を辞めてしまいました。

もちろん周囲からは大反対されました。何の計画性もないのですから。ネットショップに注文は来ないし、開いた書道教室にも生徒がきません。でも不思議なこ



「紡」  
これだけ紡がれてきたのだから。  
これから出逢う糸たちと  
何を紡いでいけるのだろうか。

とに、当時はすごくパワーが湧いていて不安を凌駕していました。生まれて初めて、心からやりたいという気持ちで満ちあふれてきたんです。

僕の世代には多いと思うのですが、子どものころからなんでも与えられてきて、強い反抗期もなく、友だちとのけんかや競争も面倒だったり、何かに執着することもなかったんです。大学や就職も含め、自分で何もかも選んでいるつもりでも、実は他人の作った枠の中でしか生きていなかった。社会に出て、ようやくそのことに気付いたんですね。

## 人に感動されることの喜びを知り、 すべてが変わった

——ストリート書道など、ユニークな活動をされていますが、どのような経緯で始められたのですか。

独立した当初は、仕事はないもののエネルギーだけはあり余っていたので、毎朝早く目覚めて、やりたいことが次から次へと出てきて落ち着かないんです。ちらしを配ったり、Webサイトも毎日更新していました。実際は空回りばかりで、何をやってもうまくいきませんでした。全く気になりませんでした。ストリート書道も、他人に作品を見てもらいたいけれど何の人もないので、人の多い街中の路上に作品を広げただけなのです。始めた当初は冷たい目で素通りされるばかりでした。

ところが、「あなたの好きな字を書きます」と看板を立てたところから変化が起きました。いろいろな人が立

### プロフィール ● たけだ・そうん

1975年、熊本県出身。3歳の時から書家である母、武田双葉に師事する。東京理科大学理工学部卒業後、NTTに入社。約3年間の勤務後、書道家として独立。書道教室を開くと同時にネット上で筆文字によるロゴや名刺、表札などのデザイン制作活動、ストリート書道など独自の活動を展開。商品ロゴや映画の題字を手がけるほか、音楽家、狂言師など多くの有名アーティストとのコラボレーションによるパフォーマンス書道で注目を浴びる。現在書道教室の門下生約300名を抱え、テレビ出演、雑誌連載など幅広く活躍中。2003年上海美術館「龍華翠褒賞」、イタリア「コスタンツァ・メディチ家芸術褒賞」受賞。著書は「『書』を書く愉しみ」「書愉道」「たのしか」など。<http://www.souun.net>



「命」  
強くも儂いすべての命よ  
みんな仲良くなれ

「波」  
生命体は波そのものではないのか。  
何をやっても波が立ち  
共鳴を起こすのであれば、  
どうせなら  
質の高い大波を創り出そうと思う。

ち止まって、悩みなどを話していくようになったのです。相手の話を聞き、その人が喜んでくれるようにと文字を書くと、僕の字に感動して泣き出す人までいました。そんなコミュニケーションの中で、「うまい」と評価されることよりも、「人に感動される喜び」の方がはるかにうれしいということを知ったのです。「僕の書を見て！」という“押し付け”の気持ちがなくなりました。その時Webサイト上で、「書で1億人に感動を与える」と宣言しました。

それからいろいろなことが変わり始めました。他分野のアーティストとのコラボレーションや、パフォーマンス書道、個展、テレビや雑誌の仕事も、自分から企画したものは何もありません。次々に縁が生まれて広がっていったのですが、これも「1億人に感動を」という軸となる目標に引き寄せられる縁なのだと思います。だから、自分自身には何の気負いも焦りもないですし、日々、感謝するだけです。

——書で感動を与えることは、「自分を表現する」とは違うのでしょうか。

もし僕が何か感動させようと意図しても、人がそのまま受け取ることはないでしょう。

例えば「悲しみ」を表現しろと言われても、僕自身の「悲しみ」にも無限の意味がありますし、そもそも

「悲しみ」とはなんぞやと、哲学的な問いが生じてしまいます。仮に僕が「悲しみ」を表現し、見た人々が「悲しい」と感じたとしても、それぞれにいろいろな経験や思いがあり、何かの相互作用が生じて、たまたまその時「悲しい」と感じたのであって、ひとつとして同じ「悲しみ」はありません。まして、同じものを見ても、同じ体験をしても、人によって感じ方は全く違います。個展では書の形や墨の色に感動する人もいれば、言葉の持つ意味に泣く人もいます。会場の空気に影響を受けて、「理由はわからないけど涙が止まらない」という人もいます。

教室で子どもたちを教えていると、人の感受性は生まれつきかもしれないと感じることもありますし、経験や環境、生きてきた背景にも影響されるのだとも思います。ですから僕は「自分を表現する」ことよりも、「人がなぜ感動するのか」「どうしてそう思うのか」というプロセスに非常に興味があります。人の本質を知り、1億人を感動させるためにも、心理学や歴史や科学も学びたいし、本を読み漁っていますが、まだまだ勉強中です。もっとも参考になり、大変ありがたいのは、教室の生徒さんも含めた人生の先輩方から聞く話です。

ただ、もっと単純に、「書」という具現化された形そのものに格好良さや美しさを感じることはあると思います。人の思いは、頭の中で言葉に変換される段階でものごく絞られます。さらにそれを表現する段階では、声に出すにしても、文字として書くにしても、全身の筋肉運動やその場の空気振動、道具などあらゆるものの影響を受けます。その制約された中で表現するからこそ、美しさや感動が生まれるのではないのでしょうか。

書くときは、ただ無心です。何枚も書きながら、ああでもない、こうでもない筆を動かし、その時一番良いと思うものを選ぶのですが、それも翌日になれば変わっていることもあります。今の自分と明日の自分





出典：『たのしか』（武田双雲著、ダイヤモンド社、2006年）

は違いますから。そもそも最近、自分と他人を明確に分けることすら意味のない気がしています。「自分を表現」と言いますが、自分の言葉も概念も、人に倣い身に付けたものですし、感情も他人とのかかわりの中で作られるものです。完全な「オリジナリティ」は存在し得ないし、「武田双雲」自体が、他人によって作られたものだと思うのです。

—— 伝統としての書道についてはどのように感じられていますか。

書道家ですから、古典やさまざまな書体も学んでいますが、あまり勿体つけて芸術とか伝統とかに縛られる必要はないと考えています。

本来、「書」は書道家のものではありません。アーティストという概念は現代の豊かさの中で生じたもので、「書」は「文字」であり「言葉」。何かを伝える手段に過ぎなかったのです。例えば、書体や古典作品について習うときも、書体を分類したり、ただ決まりどおりの論評を学ぶことには興味がわきません。むしろ大切なのは、その書体が生まれた歴史的な背景や、その字を書いた人物の置かれた環境やその時の心情、また、なぜ現代にもその作品が伝わり続け、好かれているのかを知ることです。筆や墨などの道具や持ち方についても同様です。その道具の材質や職人さんが込めた思い、どうしてそういう形になったのか、なぜその持ち方になったかなど、本質を自分で考えて初めて意味がある。ただ「伝統だから」だけでは、心が動かないと思うのです。

もちろん、書道の楽しさは多くの人に知ってもらいたい。以前は日本文化を盛り上げようと思ったこともあります。今はまず自分が楽しんでいればついてきてくれるかなど。自分の活動がきっかけになって、「なんとなく」でも「伝統って格好いい」でも構わないので、書道に興味を持ち、やがて感動してもらえればうれしいですね。



## 感性は、興味を持って 行動を始めることで高まっていく

—— 感動する力は、どうすれば高まるのでしょうか。

何をどう感じるかは受け取る人間次第ですが、実は、“感動する力”は、ラクをしていては持てないのです。

実際、作品に触れて涙を流されるのは、悩みや苦しみを乗り越えてきた方や、現在も頑張っている方が多い。悲しみに限らず、感動する力が強い方には、日常生活で楽しみや喜びを見つけ、感謝し、積極的に生きている方が多いようです。

大人になる過程で、次第に持って生まれた感性を抑えるようになってきた人も多いでしょう。でもまだ間に合います。キーワードは好奇心と行動。この二つは連動しています。例えば掃除を始めてテーブルを拭いたら、それまで気にならなかったその先の汚れが目につき始めるというように、感性は、何かに興味を持って動き始めることから少しずつ高まっていくものだと思います。

—— 読者の皆様にメッセージをお願いします。

日々の思いを文字で書き付けることをお勧めします。書道である必要はありません。教室でやっているのは、何かテーマを決めて各自が自由に、思い浮かんだ文字を書くというもの。例えば「お金とは」とあげると、皆それぞれに違う言葉を書きます。「欲しい」とか「〇〇円」と書く人もいれば、「あっても苦しみ」という人も（笑）。具現化された文字を見ると、改めてなぜそう思うのか、何にこだわっているのか、自分を客観視できます。ストレスの原因がわかって、書くだけですっきりする人もいます。書は、自己表現するものというよりも、忘れていた自分に気付き癒すものです。ぜひ試してみてください。